

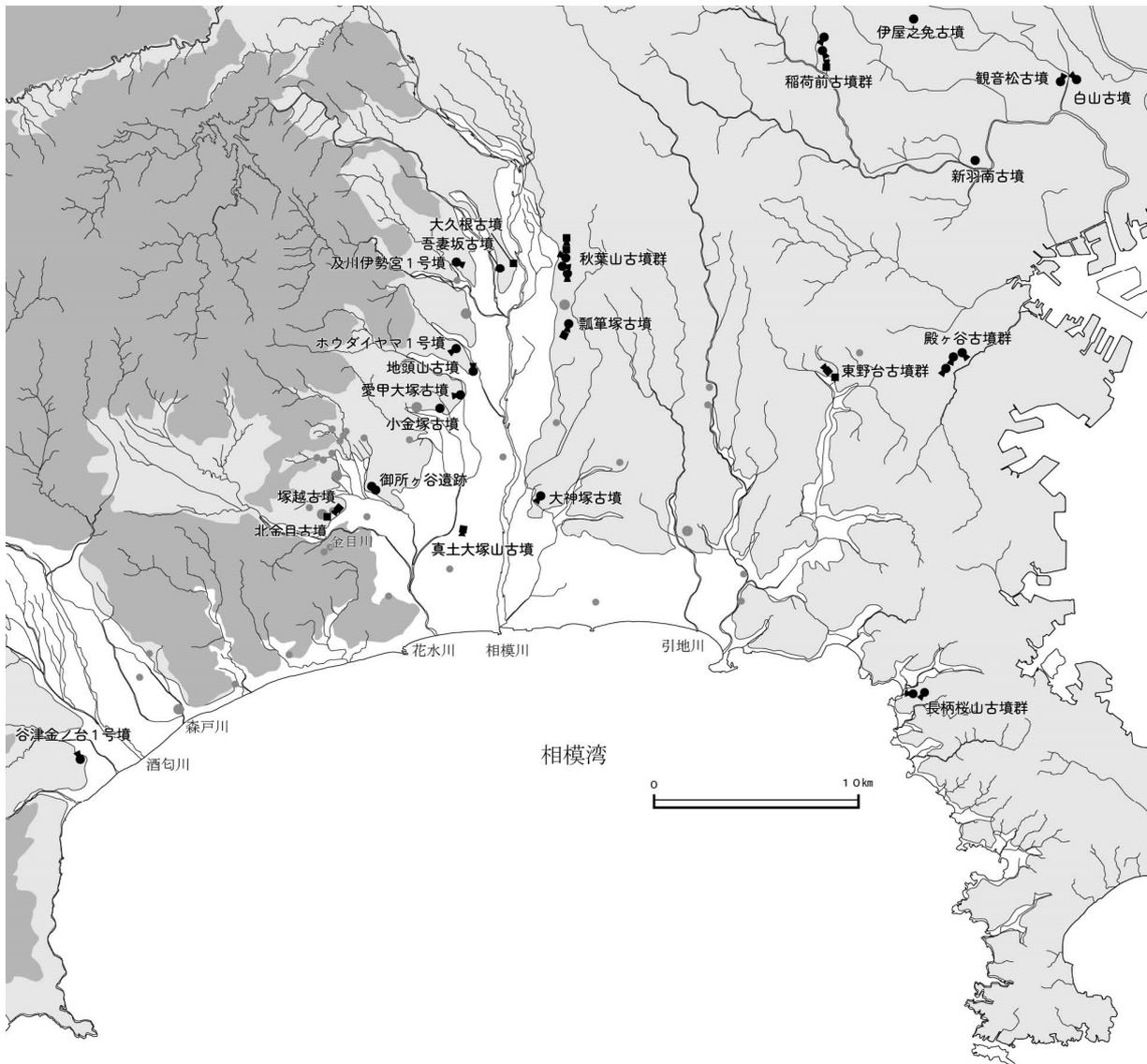
令和 7 年度第7回考古学講座

史跡長柄桜山古墳群とかながわの前期古墳

葉山町教育委員会 山口 正憲

はじめに

今回の講座では、最初に神奈川県内の前期古墳をあらためて概観し、県内の前期古墳の特徴についてお話ししたいと思います。そのうえで、国指定史跡長柄桜山古墳群が神奈川県内の他



第1図 神奈川県内の前期古墳分布図

の前期古墳とは異なる点や画期性について解説し、その背景について考えるきっかけが提供できたらよいと考えています。

史跡長柄桜山古墳群第1号墳は、令和7年度に整備事業が完了し、古墳の上に登って見学できるようになりました。講座に参加された皆様が現地を訪れるきっかけとなるよう、史跡整備の概要についても写真を交えながら解説します。

講座で対象とする領域は、旧相模国全域および武蔵国南部（現在の川崎市・横浜市域）を含む神奈川県全域です。地形的には、相模川、金目川、酒匂川、鶴見川といった主要河川流域の沖積平野と、それを画する丘陵地帯、そして相模湾と東京湾を分かち三浦半島が含まれます。ここでは便宜上、相模地域、三浦半島、川崎市・横浜市域に地域区分して解説します。

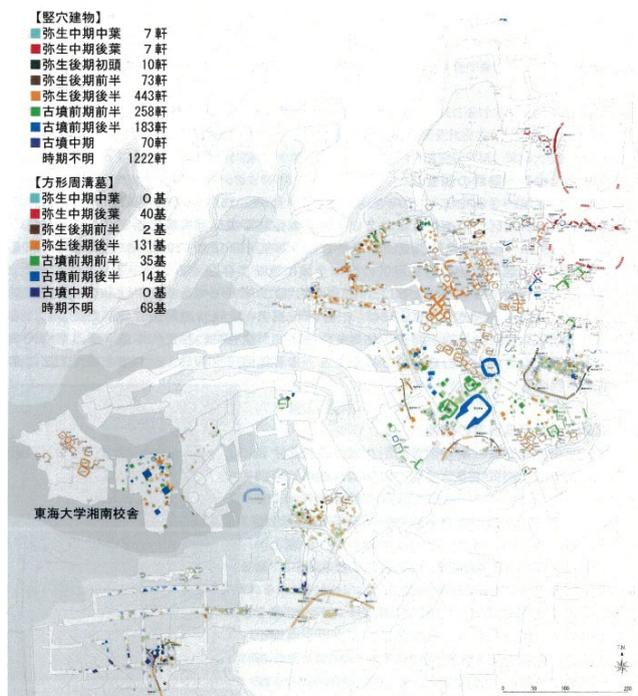
対象とする「古墳時代前期」ですが、古墳時代前期前葉、前期中葉、前期後葉のおよそ3期に区分して説明します。前期前葉がおよそ3世紀後半から～4世紀初頭、前期中葉が4世紀前半、前期後葉が4世紀後半としておきます。

## 神奈川県の前期古墳分布

神奈川県の前期古墳分布には、いわゆる「偏在性」が指摘されています（西川 2001）。神奈川県の前期古墳は、相模川水系や金目川水系に集中する一方で、酒匂川水系（足柄平野）や三浦半島には希薄です。西川修一さんは前期古墳の分布が希薄な足柄平野や引地川・境川流域、三浦半島にも弥生時代後期からの集落が継続して営まれていることから、前期古墳の築造には弥生時代後期からの社会集団の発展をベースにしている一方で、それだけでは説明できないことから、「交通」の問題の重要性を説いてきました（西川 1991）。

## 相模地域の様相

弥生時代中期以降、相模地域では、方形周溝墓が墓制の主体をなしています。弥生時代後期後半には海老名市本郷遺跡や平塚



第2図 真田・北金目遺跡群全体図(白川編 2025)

市真田・北金目遺跡群などに見られるように、集落の近傍に方形周溝墓が群集して造営されます。弥生時代後期から古墳時代にかけての墓制の変遷を辿ることができ、分析が進んでいる真田・北金目遺跡群を中心に見ていきたいと思えます（第2図）。弥生時代後期後半の方形周溝墓は、特定の個人を突出させるのではなく、共同体の一員として葬られることを重視した社会規範を示しています。一部の墓には鉄製短剣や銅製の腕飾類などの入手しにくい財物が副葬されていても、墳丘規模に格差がない点は、この段階ではまだ、個人が共同体の枠組みを大きく超えるには至っていなかったことを示唆しています。

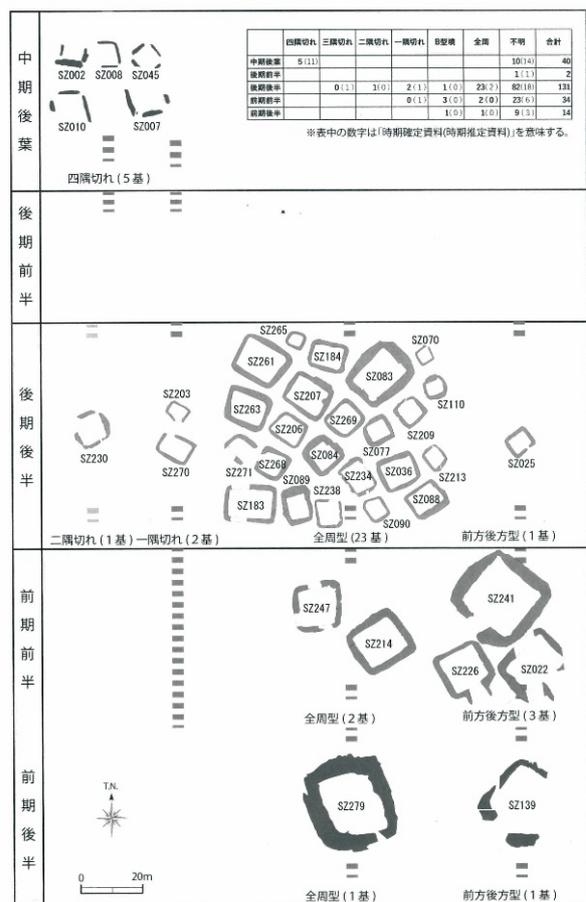
### 墓域の縮小と「選ばれた死者」

しかし、古墳時代前期前葉に入ると、立花実さんが指摘するように、この様相に質的な変化が生じます（立花 2001, 2025）。

**墓域の縮小:**それまで連綿と築造されてきた方形周溝墓の絶対数が減少することから、集落の構成員のうち墓域に埋葬される対象が限定される傾向が強まります。

**墳丘規模の拡大:**従来の方周溝墓の枠組みを超え、前方後円形・前方後方形を指向する墳墓が出現し始めます（第3図）。弥生時代後期後半以来大規模な方形周溝墓群を形成する真田・北金目遺跡群では、新しく周溝の一边の中央が途切れる前方後方型周溝墓が出現します。規模にはばらつきがありますが、一边20m前後の比較的大型の方墳も築造されるようになります。これは、墓を造ることができる資格が、集団の構成員全員から、特定の階層へと限定される過程を示しているのかもしれませんが、そして、弥生時代後期以来の方周溝墓群を壊すことなく、全長約50mの前方後方墳である塚越古墳が築造されるに至ります。

塚越古墳は、粘土床の埋葬施設に管玉や鉄



第3図 真田北金目遺跡群における方形周溝墓の変遷(白川編 2025)

製工具、ベンガラを副葬しており、明らかに周囲の方形周溝墓とは異なるリーダーの墓としての性格を持っています。しかし、その出自はあくまで周囲の方形周溝墓群の延長線上にあり、地域共同体の内部から選出されたリーダーであることを物語っています。

弥生後期以来の伝統的な集落、社会集団をベースに前方後円墳が築造されるのは、厚木市ホウダイヤモンド1号墳や愛甲大塚古墳、あるいは円墳の小金塚古墳などでもそうであり、基本的な古墳築造のプロセスであると考えられます。

## 秋葉山古墳群の成立と展開

塚越古墳とは異なる様相を示すのが、海老名市秋葉山古墳群です（第4図）。秋葉山古墳群は、相模川中流左岸の座間丘陵縁辺に立地し、眼下に広大な相模平野と丹沢大山を望む絶好の位置にあります。ここには、3世紀後半から4世紀後半にかけて、継続的に首長墓が築造されます。

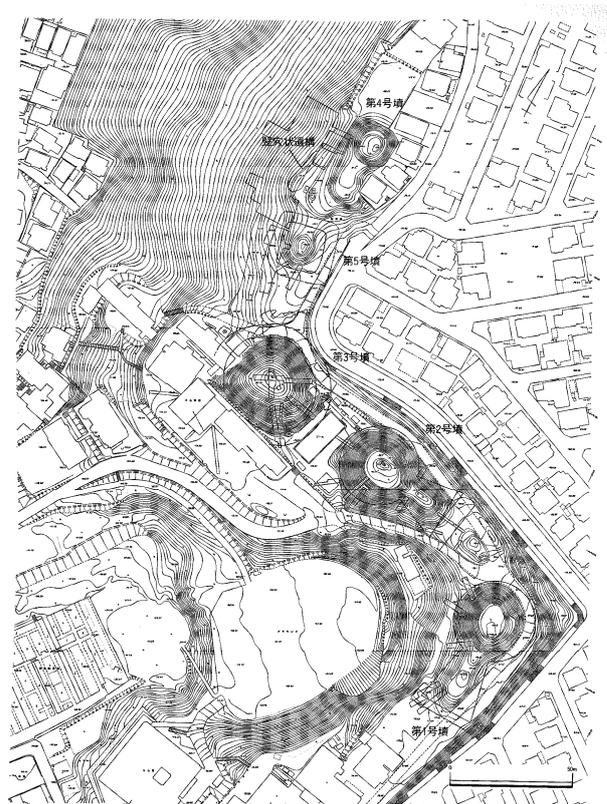
### 秋葉山第3号墳:県内最古の前方後円墳

秋葉山第3号墳は、出現期の古墳（古墳時代前期前半）に位置づけられ、神奈川県内における最古の前方後円墳です。

**構造:** 全長約 51m（推定）。後円部は不整な円形を呈し、前方部は未発達ですが、明確な前方後円形を指向しています。

**出土遺物:** 周溝には底部穿孔のない在地系の壺形土器が配置されています。墳頂部では高坏や脚付の鉢を用いた祭祀が行われており、水銀朱の付着が確認されています。

**意義:** 秋葉山古墳群は、集落や共同体の墓域である方形周溝墓群から空間的に隔絶した高所に築かれており、特定の人物に対して規模の大きな墓を作り、特別な葬送儀礼が行われたことを明確に示しています。同時に、その祭祀形態や土器様相には在地の伝統を色濃く残しているのが特徴です。



第4図 秋葉山古墳群(押方他 2002)

## 第 2 号墳から第 1 号墳への系譜:在地化する「古墳」

続く 4 世紀初頭に築造された秋葉山第 2 号墳（全長 50.5m）では、後円部が正円形に整い、墳丘の定型化が一見進みます。一方で特筆されるのは「円筒形土製品」の出土です。これは、畿内の特殊器台形埴輪もしくは円筒埴輪を模倣したものと思われませんが、透孔や突帯を持たない独自の形態をしており、埴輪祭祀が導入される以前の、地域独自の解釈による古墳祭祀の導入を示唆しています。畿内の埴輪祭祀をそのまま受け入れたのではなく、地域の工人が「埴輪的なもの」を作り出し、祭祀に取り入れたことを示しています。

さらに 4 世紀後半には秋葉山第 1 号墳（全長 59.5m）が築造されます。このように、同一丘陵上に近接して約 100 年間にわたり、50～60m 級の古墳が継続的に築造された数少ない古墳群です。

## 古墳群築造の背景

秋葉山古墳群は集落から隔絶した台地上の高所に築かれましたが、その被葬者たちの経済的・政治的基盤はどこにあったのでしょうか。

ここ四半世紀の調査の進展により、古墳群から見下ろす相模川左岸の自然堤防上において、社家宇治山遺跡や河原口坊中遺跡など、大規模な集落・墓域跡が発見されるようになりました。

これは、秋葉山古墳群の被葬者が、台地上だけではなく、水資源と生産力に富んだ相模川低地の集落を基盤としていたことを示唆しています。

特筆されるのは、秋葉山古墳群が所在する海老名市域では本郷遺跡や本郷中谷津遺跡などで玉作が行われていたことが分かっていますが、社家宇治山遺跡でも玉作が行われていたことが明らかになった点です。

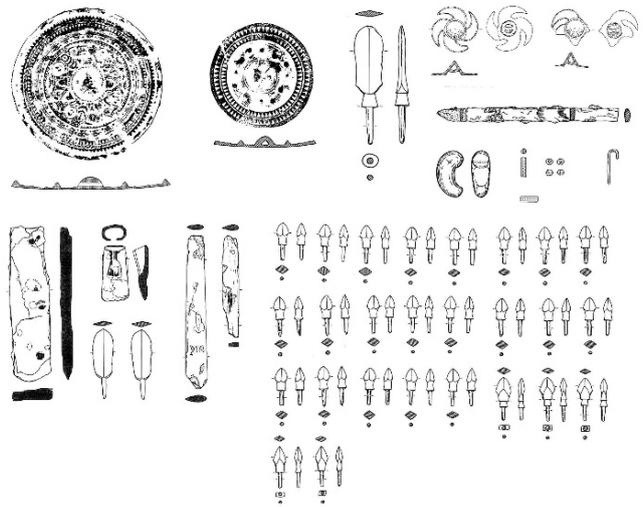
原料となる緑色凝灰岩は丹沢山地から相模川の水運を利用して運搬されたと考えられます。遺跡からは緑色凝灰岩製の管玉未成品や剥片が出土しておりますが、これらが地域内で消費されたのか、あるいは地域を超えて「商品」として生産が行われていたのか、明らかにしていく必要があります。

秋葉山古墳群が「眼下に広大な相模平野と丹沢大山を望む絶好の位置」に築かれたのは、たんに景観が良かったからではありません。それは、「相模川の水運」と「玉作生産」を掌握する立地選定であった可能性を考えていく必要があります。

## 真土大塚山古墳

平塚市の真土大塚山古墳の存在は重要です。現在は消滅していますが、かつての発掘で三角縁神獸鏡、変形四獣鏡、巴形銅器、多数の武器類が出土しており、その副葬品の質と量は県内随一です（第5図）。前方後円墳と前方後方墳ともいわれ、墳丘の形状や規模については諸説あり、明らかではありません。

真土大塚山古墳は、相模川河口近くの砂丘列上に立地しており、海岸から直線距離にして約5kmの位置にあります。水運を意識しているようにも見えますが、海と古墳の間には海岸線に並行して何列もの砂丘列があり、海からの視認性は高いとは言えません。また、墳丘規模は推定ですが40m級とさほど大きいものではないこともふまえると、後述する長柄桜山古墳群のような、ランドマークとしての役割が強調された築造では必ずしもなかったのかもしれない。



第5図 真土大塚山古墳の副葬品(平塚市 1999)

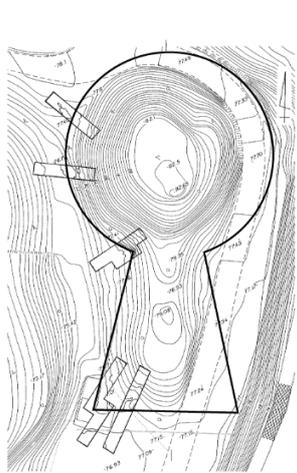
## 相模地域の前期古墳の特徴

**農耕社会の連続性:** 弥生時代以来の生産基盤の上に立ち、集落の盛衰と連動して古墳が築造されるのが一般的です。

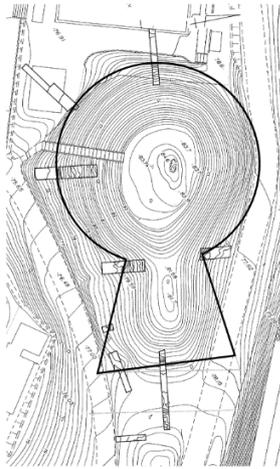
**方形原理の強さ:** 前方後円墳（円形原理）が出現した後も、前方後方墳や方墳といった方形原理に基づく墳墓が根強く残存し、あるいは選択されました。

**前方後円墳の墳丘:** 墳形や大きさがはっきりとしない古墳も多いですが、相模川流域で最大規模の前方後円墳は70～80mの厚木市・伊勢原市愛甲大塚古墳（石田車塚古墳）と海老名市瓢箪塚古墳です。多くは50～60mクラスの前円後方墳や前方後方墳です。

注目したいのは相模川流域の前円後方墳はくびれ部が細い傾向がある点です（第6図）。相模川流域では秋葉山第2号墳のような前期前葉～中葉の前円後方墳はもとより、及川伊勢宮1号墳のように前期後葉の前円後方墳にもみられる特徴であることから、時間的な変化を示すというよりも、地域的な特徴を示す可能性が高いと考えられます。



秋葉山第1号墳 (押方他 2002 改図)



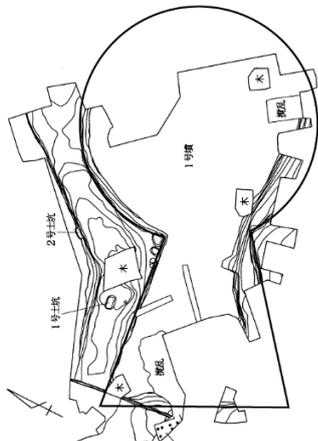
秋葉山第2号墳 (押方他 2002 改図)



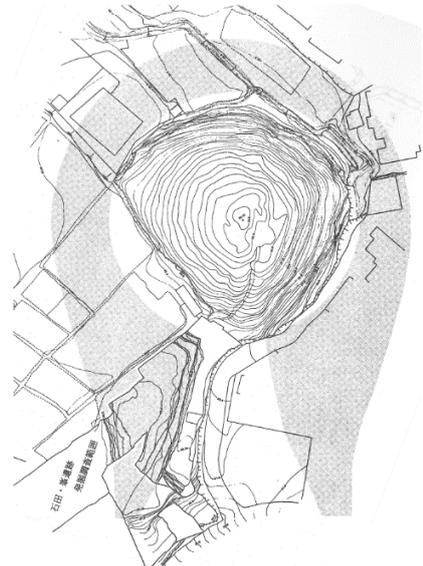
秋葉山第3号墳 (押方他 2002 改図)



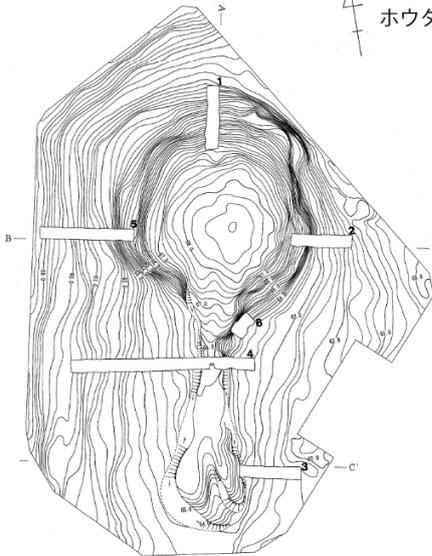
及川伊勢宮1号墳  
(戸羽 2025)



ハウダイヤマ1号墳 (平本 2000 改図)



愛甲大塚古墳 (立花 1998)



瓢箪塚古墳 (押方 1997)



地頭山古墳 (厚木市 1998)



塚越古墳 (中嶋 2012)

第6図 相模地域の前方後円墳、前方後方墳

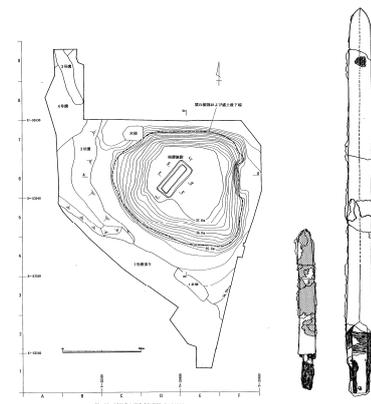
## 川崎市・横浜市域

### 方形周溝墓から前方後方形周溝墓へ

武蔵南部地域、現在の川崎市および横浜市域においても、弥生時代後期には方形周溝墓が広く営まれていました。古墳時代前期前半になると、横浜市都筑区の権田原遺跡や青葉区の稲ヶ原遺跡 A 地点では前方後方形の周溝墓が確認されるようになります。

### 横浜市域最古の「古墳」

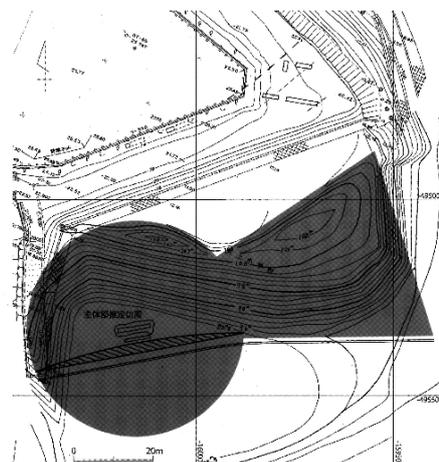
地域のリーダーがより明確に「古墳」を築く嚆矢となるのが港北区の新羽南古墳です。横浜市内最古の古墳とされ、古墳時代前期前半（3世紀後半）の築造と推定されます。墳丘は径 21 メートル、高さ 3メートルを測る円墳であり、墳頂部の墓壙からは木棺の痕跡とともに、副葬品として鉄剣、鉄槍、勾玉、ガラス小玉が出土しています（第 7 図）。主体部上からは葬送儀礼に使用された土器片が検出されています。新羽南古墳の被葬者は、相模の秋葉山古墳群と同様、新たな葬送儀礼をいち早く取り入れ、視覚的に高い墳丘をもつ墓を築いた点で、それまでの墓とは一線を画します。



第7図 新羽南古墳  
(河合ほか 2006)

### 加瀬白山古墳と観音松古墳

古墳時代前期中葉から後葉になると川崎市・横浜市域にも大型の前方後円墳が築造されるようになります。前期中葉の川崎市加瀬白山古墳は、全長 87mを測る大型前方後円墳で、後円部に 3 基、前方部に 1 基の埋葬施設が発見され、三角縁神獣鏡が副葬されていたことでも知られています。加瀬白山古墳から矢上川を挟んで西に約 500 mの台地上に築造された観音松古墳は、墳丘のほとんどが破壊されてしまいましたが、全長約 101mの大型前方後円墳と推定されており、加瀬白山古墳に後続する前期後葉の大型前方後円墳です。後円部に 2 基ないし 3 基の埋葬施設が設けられ（安藤 2015）、内行花文鏡、銅鏃・石製品などの副葬品が出土しています。



第8図 観音松古墳墳丘復元図  
(安藤 2015)

## 三浦半島：東京湾岸交流圏の長柄桜山古墳群

相模川流域や武蔵南部地域で着実な社会発展が続く中、三浦半島の付け根に突如として出現した長柄桜山古墳群は、神奈川県内の古墳時代史における画期です。

### 圧倒的な規模と定型性

長柄桜山古墳群は、逗子市と葉山町の境、標高約 100m～120m の丘陵尾根上に築かれた 2 基の大型前方後円墳です（第 9 図・第 10 図）。

第 1 号墳：全長 91.3m。後円部径 52.4m。後円部 3 段、前方部 2 段の段築を持ちます。

第 2 号墳：全長 88m。第 1 号墳に先行して築造された可能性があり、墳丘表面には葺石が施されています。

長柄桜山古墳群は規模において相模地域では圧倒するものの、東京湾岸エリアでは鶴見川流域の川崎市加瀬白山古墳（87m）や横浜市観音松古墳（101m）、多摩川流域では大田区宝萊山古墳（97m）や亀甲山古墳（107m）など、同規模の前方後円墳が流域ごとに展開しています。ただし、段築や葺石といった、畿内の定型的な大型前方後円墳に通有の築造技術を具備していることが確認されている点で、県内の他の前期古墳とは一線を画しています。

### 東京湾岸交流圏との結びつき

重要なのは、この古墳群の埴輪の特徴が東京湾岸～東関東地方と共通している点が多いことです。三浦半島は、ヤマト王権から一方的に文化を授与される辺境ではなく、房総や南武蔵を含む活発な交流圏の一翼を担っていました。長柄桜山古墳群の被葬者は、この交流圏の中で力を蓄え、海を行き交う多様な集団の利害を調整し、まとめることができる実力を持っていたからこそ、90m 級の巨大古墳を築くことができたと考えられます。

### 埴輪と地域アイデンティティ

長柄桜山古墳群からは、円筒埴輪と壺形埴輪が出土しています。円筒埴輪は、突帯や透孔を持つ本格的なものであり、秋葉山第 2 号墳の「円筒形土製品」とは系譜を異にします。突帯や透孔をもつ古墳時代前期の円筒埴輪は、神奈川県内では長柄桜山古墳群のほかに伊勢原市小金塚古墳から出土していますが、小金塚古墳出土の朝顔形円筒埴輪は、形状、突帯、透孔、いずれも定形的で、埴輪製作に精通した工人が関与したことがうかがわれます。一方長柄桜山古墳群の円筒埴輪は、「土器」のように薄く作られ、基部（底部）の外側は丸く膨らみ、全体の四

半分がハの字に開く特徴を持っています。ハの字に開く特徴は、北関東から東関東を中心に分布するいわゆる器台形埴輪との共通性も認められなくはありませんが、技術的なつながりがあったといえるような証拠はありません（第11図・第12図）。

また、長柄桜山古墳群出土の壺形埴輪は、東京湾岸～東関東の前期古墳出土の壺形埴輪と極めて類似しています。このことは、壺形埴輪はむろん、特徴的な円筒埴輪の系譜についても、東京湾岸交流圏という広域ネットワークを経由して供給された可能性を強く示唆しています。

## ランドマークとしての機能

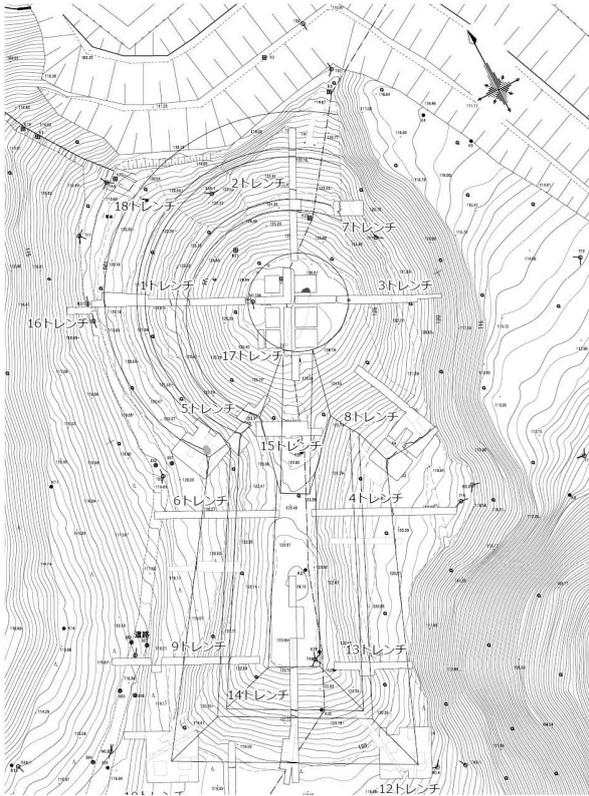
長柄桜山古墳群の立地は、相模湾と東京湾の双方を視認できる絶好のポイントにあります。第1号墳からは眼下に田越川流域と逗子湾、さらには相模湾全体を、第2号墳からは東京湾口方面を意識した眺望が得られます。この古墳の被葬者が統括した集団に見せるという内向きの視線以上に、集団の外部、特に海上を行き交う船から見られる」という外向きの視線を意識して築造されたと考えられます。

房総半島から三浦半島を経由して相模湾へ抜けるルートは、東西を結ぶ重要な交通ルートだったと考えられます。長柄桜山古墳群は、三浦半島を往来する人々に対して「ランドマーク」としての役割を果たしたと考えられます。

## おわりに

神奈川県の前期古墳を概観した後に長柄桜山古墳群の特徴をみていくと、その違いがよく分かると思います。長柄桜山古墳群は、三浦半島の相模湾岸側にありながらも、東京湾岸との交流の中で成立した可能性が濃厚な古墳群であり、相模地域の前期古墳とは異なる築造背景を持っていたと考えられます。相模地域では秋葉山古墳群や真土大塚山古墳のように、古墳時代前期前半の段階にいち早く前方後円形の墳墓を採用したり、豊富な副葬品を入手しながらも、80mを超える大型前方後円墳の築造には至りませんでした。一方で、三浦半島や武蔵南部では前期中葉～後葉に大型前方後円墳の築造に至ったことは興味深い事象です。それぞれの地域だけを見ていると、あたかも個別の事象が起きたかのように見えますが、これらは決してバラバラに起きた現象ではないのかもしれませんが、こうした規模の差異は、三浦半島や武蔵南部が「東京湾岸交流圏」を介して、互いに連動した事象であったのではないのでしょうか。

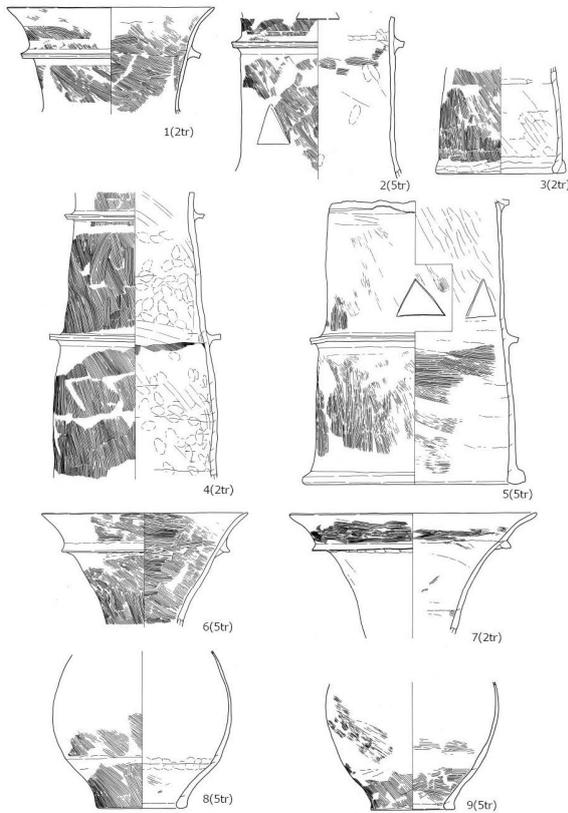
神奈川の前期古墳が示す多様な姿は、こうした交流圏の広がりや、それぞれの地域が選んだ社会のあり方の違いを反映しているのかもしれませんが。



第9図 長柄桜山古墳群第1号墳 (佐藤・山口 2012)



第10図 長柄桜山古墳群第2号墳 (柏木・依田 2001 を改図)



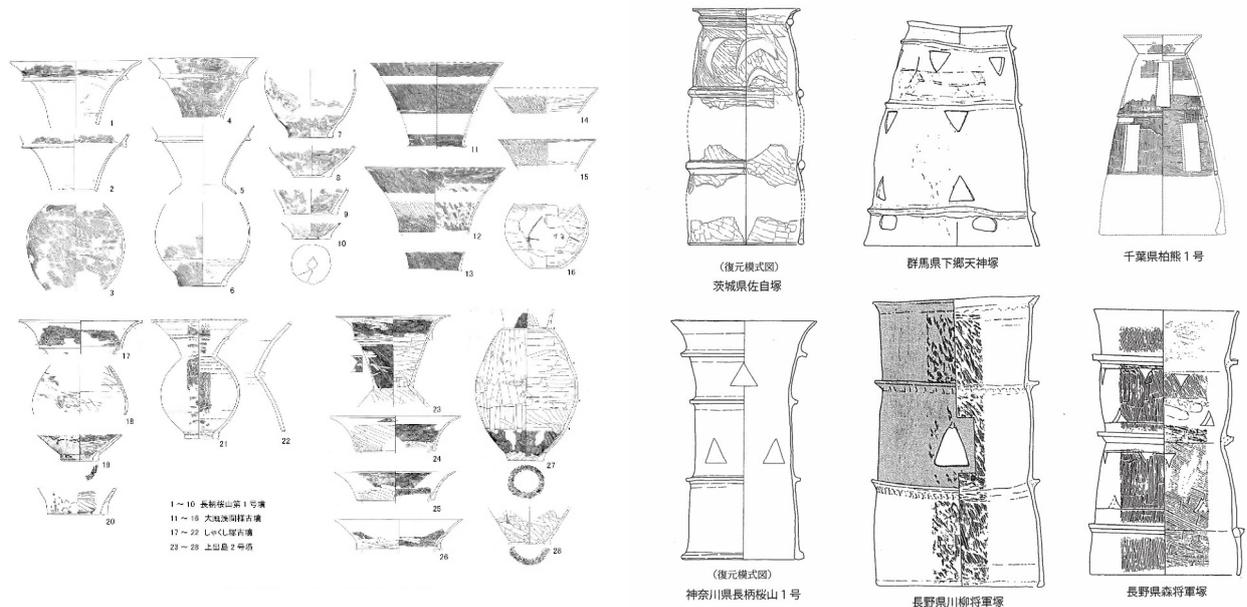
第11図 第1号墳出土の埴輪 (山口ほか 2025)



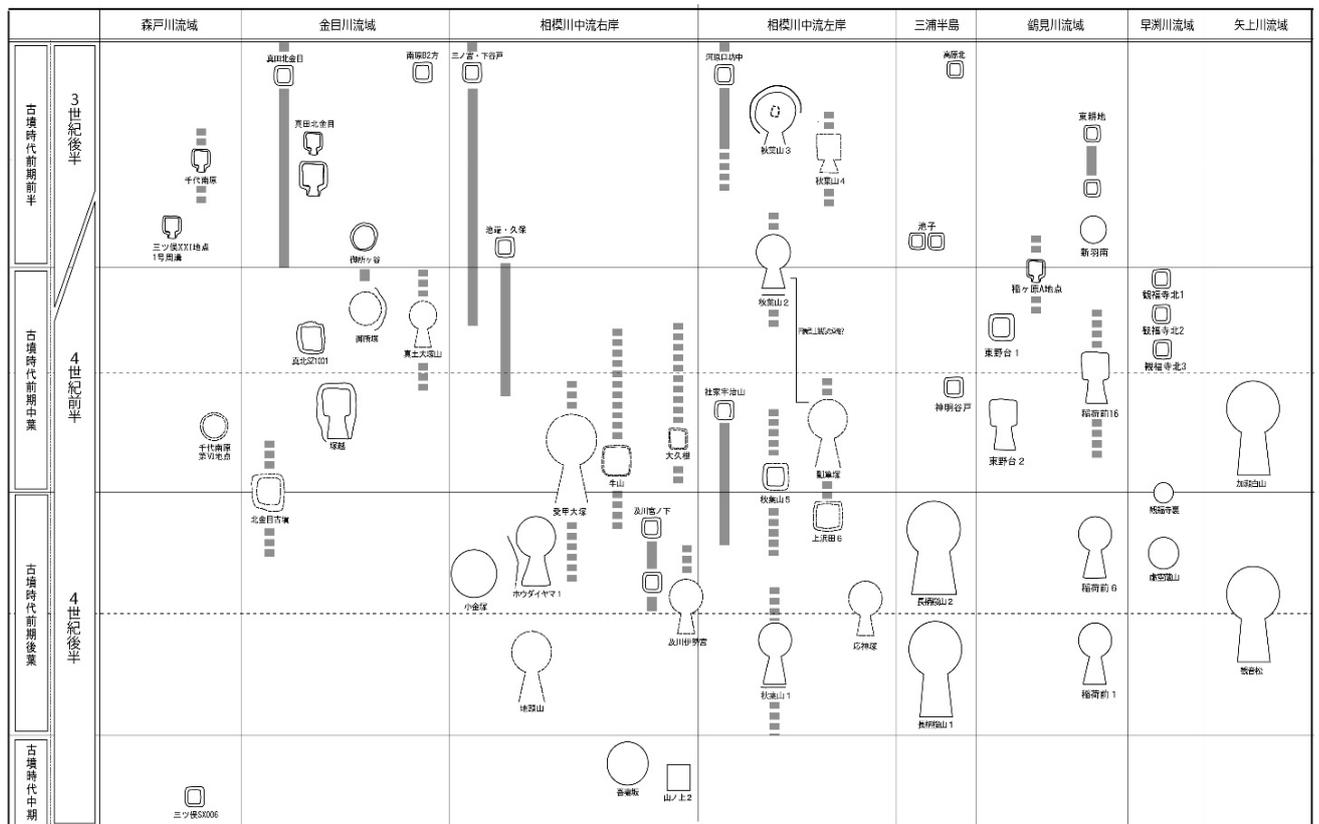
写真1 整備された第1号墳



写真2 整備された第1号墳の埴輪



第12図 長柄桜山古墳群の埴輪と類例(佐藤・山口2012,古屋 2021)



第13図 神奈川県の前期中古墳の変遷

## 引用参考文献

- 西川修一 1991「弥生の路・古墳の路―神奈川の場合―」『古代』第92号 早稲田大学考古学会
- 押方みはる 1997『瓢箪塚古墳―上浜田古墳群第7号墳―発掘調査報告書』海老名市教育委員会
- 神奈川県考古学会 1998『平成9年度考古学入門講座 神奈川の古墳―その出現と展開』
- 立花実 1998「西相模の古墳」『平成9年度考古学入門講座 神奈川の古墳―その出現と展開』神奈川県考古学会
- 平塚市編 1999『平塚市史』第11巻上別編考古(1)平塚市
- 平本元一 2000「厚木市ホウダイヤマ遺跡」『第23回神奈川県遺跡調査研究発表会発表要旨』神奈川県考古学会
- 平塚市博物館 2001『相模国の古墳 相模川流域の古墳時代』平塚市博物館
- 西川修一 2001「相模国の萌芽」『相模国の古墳―相模川流域の古墳時代―』平塚市博物館
- 立花 実 2001「相模国の様相(1)」『相模国の古墳―相模川流域の古墳時代―』平塚市博物館
- 柏木善治・依田亮一 2001『長柄・桜山第1・2号墳測量調査・範囲確認調査報告書』神奈川県教育委員会・かながわ考古学財団
- 海老名市編 2001『海老名市史』1資料編 原始・古代 海老名市
- 押方みはる他 2002『秋葉山古墳群第1・2・3号墳発掘調査報告書、第5-9次調査』海老名市教育委員会
- 向原崇他 2004『秋葉山古墳群第3・4号墳発掘調査報告書、第10-12次調査』海老名市教育委員会
- 安藤弘道 2005「観音松古墳の研究」1『史学』第78巻4号 慶應義塾大学民俗学考古学研究室
- 河合英夫ほか 2006『新羽南遺跡・新羽南古墳』玉川文化財研究所
- 中嶋由紀子 2012『塚越古墳 平成19・21年度塚越古墳保存目的調査報告』平塚市埋蔵文化財緊急調査報告書15 平塚市教育委員会
- 佐藤仁彦・山口正憲 2012『国指定史跡長柄桜山古墳群第1号墳発掘調査報告書』逗子市教育委員会・葉山町教育委員会
- 安藤弘道 2015「観音松古墳の研究」2『史学』第85巻第1-3号(第二分冊) 慶應義塾大学民俗学考古学研究室
- 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター2014「横浜の前期古墳」『まいぶん横浜』30
- 西川修一 2016「相模湾沿岸部における古墳時代の臨海墓制について」『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書―(仮称)由比ガ浜こどもセンター建設に伴う由比ガ浜三丁目194番1、262番1地点の調査』株式会社斉藤建設
- 古屋紀之 2021「第2節 佐治塚古墳出土の土器・埴輪類の系譜と祭祀」『茨城県石岡市佐自塚古墳の研究―1963年発掘調査報告書―』明治大学文学部考古学研究室
- 西川修一 2024「前期古墳の東遷と土器伝搬」『古墳時代の交通と流通』考古学調査ハンドブック25 ニューサイエンス社
- 山口正憲 2024「相模地域の概要」『出土土器からみた古墳の年代』東日本古墳確立期土器研究会
- 山口正憲・佐藤仁彦・古河啓子 2025『史跡長柄桜山古墳群第1号墳保存整備事業報告書』逗子市教育委員会・葉山町教育委員会
- 戸羽康一 2025「厚木市及川伊勢宮遺跡第3地点―伊勢宮古墳群を中心に―」『第47回神奈川県遺跡調査・研究発表会発表要旨』神奈川県考古学会
- 白川美冬編 2025『北金目からみつめる地域社会発表要旨資料集』真田・北金目遺跡群集落復元プロジェクト
- 土屋了介編 2025『小田原市遺跡講演会 古墳時代前期の謎に挑む 資料集』小田原市教育委員会
- 厚木市秘書部市史編さん室編 1998『厚木市史』古代資料編(2) 厚木市
- 立花実 2025「弥生から古墳へ～土器・墓・村にみる社会の変化～」『小田原市遺跡講演会古墳時代前期の謎に挑む 資料集』小田原市教育委員会